

## 溝口雄三『中国の衝撃』

西 野 可 奈

### 1. はじめに

ここ数年の日中関係における軋みの存在については、多言を要さない状況である。ジェットロ発表によれば、2003年の日中貿易総額は1,324億2,849万ドル（前年比30.4%増）に達しているにもかかわらず、日中間の経済状況に比しての政治状況は「政冷経熱」という中国語の表現からも伺えるように、経済ほど楽観的ではないことを示している。中国側の抗議にも関わらず繰り返される小泉首相の靖国神社参拝、そしてトップクラスの政治家による自国中心の歴史認識に基づく発言、民間では、昨年中国広東省珠海市で日本人団体観光客が「集団買春」を行ったとされる事件、西安の西北大学で起きた留学生寸劇事件、そしてごく最近ではサッカー・アジア杯における中国一般民衆の反日行動に見られたような数多くの問題や事件が生じている。こうした状況に対し日本国内では、自国の歴史認識問題を掘り下げた議論よりも中国側の反日感情に対してより敏感に報道される傾向が見受けられる。例えば9月号の『中央公論』は「東アジア・ナショナリズムの危険性」という特集を組んでおり、その巻頭で外交評

論家の岡崎久彦氏は、現在、日本に向けられている中国のナショナリズムは、その原因が日本にあることを認めつつも、「政府が主導してナショナリズムを煽ることの危険性が、日本の近代外交史の教訓であるとする」と、現在、この教訓があてはまるのが、現在の中国と言っている（55頁）と論じている。また、筑波大学教授の古田博司氏は、東アジア諸国のナショナリズムについて「古層の中華思想を原型として、その上に新層の国家主義や民族主義が屋上屋を重ねるように作られており、古層からは新層にむけて自国を中華として東アジアにおける『盟主性』が容易に噴き上げられ、新層は『忘れえぬ他者』日本への反日を動機として、古層の夷狄日本への侮蔑と憎悪をかき立てるのである」（104頁）と東アジア・ナショナリズムの淵源を文化的要因に求めて論じている。

この特集には慶應義塾大学教授の国文良成氏と早稲田大学教授の劉傑氏の対談にあるように「日本では、中国ナショナリズムの高まりが『中華思想』の発露につながるのではないかという懸念があるようだが、ナショナリズムと思われる近年の民衆の主

張と中華思想は切り離して考えていいのではないか」(劉傑氏発言)、「現在、中国で目立つ動きはナショナリズムの高まりによるものというより、自信や自覚を持った中国国民の自己主張が表面化した結果と考えたほうがいい」(国文良成発言)、(77頁)、冷静かつ客観的な分析も含まれているものの、紙面構成や各論文、対談に付けられたタイトルなどから察するに、やはり最初の2名の論者に代表される、東アジアにおけるナショナリズムに警鐘を鳴らす論調が基本となっている。また、『論座』の10月号では、神奈川大学教授の田畑光永氏が「雑誌があおる反中国ムード 『文藝春秋』『諸君!』『正論』『Voice』『SAPIO』を分析する」において、01年1月から03年12月にかけて各雑誌に掲載された反中国的記事の言説分析を行っており、具体的な事件、事実に比して如何に各雑誌に見られる反応が過剰であるか示している。そして今後の日中関係における「冷静な姿勢」(81頁)の必要性を説いている。

田畑氏は、上記の論文中で「なぜこういう言説が紙誌をにぎわすのかは今の日本社会の状況と深く関わる問題であり、それはまた別に分析すべき課題である」(81頁)と指摘している。

この指摘はもっともであるが、実はこの「日本社会の状況」こそ、根本的、かつ我々がもっとも知覚しにくい問題をはらんでいる。そして、その問題に正面から取り組んだのが、本稿で紹介する東京大学名誉

教授の溝口雄三氏の『中国の衝撃』である。まずは各章の内容を本書からの引用も交えつつ簡略に紹介し、最後に本書の提示する問題を評者なりにまとめたいと思う。

## 2. 本書の概要紹介

著者が「あとがき」で本書を「ある意味で型破り」「構成にしても形式上のまとまりというものがない」と書いている通り、本書は、一般的な研究書・専門書のようにある仮説を一冊の本の中で組み立て、検証するというタイプの本では無い。いわば、「問題提起型」とも呼べる構成となっている。序章とI部(1~3)(序“中国の衝撃”1、「中国と『自由』『民主』」2、「現在形の歴史とどう向き合うか」3、「歴史認識問題はどうか問題なのか」)では、日中両国の「歴史認識問題」のあり方、特にそのギャップをめぐる議論が展開される。「序」では著者が数年来関わってきた「日中・知の共同体」プロジェクトの経験が紹介されている。そこでは「歴史認識問題」を日中間の最大の懸案事項ととらえる日本側に対して、中国の知識界ではそれを、他のグローバルな問題に比べて局地的な「あなた方日本人」の道義の問題でしかないと言う。一方で、日本人は明治維新を「脱亜入欧」の近代化の始まりとする日本一国的な近代史観を民衆レベルまで深く浸透させており、それに対する中国は、近代化においては「後れをとった」劣者であるという認識を持っている。

日々発展する経済力を背景にした中国の知識人や指導者層は戦争問題、歴史認識問題に対し、すでにクールな受け止め方を示している。それにも拘らず、日本人はいまだに「日本＝優者」、「中国＝劣者」という構図から脱却していない。「その無自覚こそが日本人にとっての“中国の衝撃”である」（本文15頁）とここで著者は厳しく指摘する。

こうした“中国の衝撃”を受けつつあるなかで、著者は、われわれ日本人が日中戦争の時期も含めて、十六世紀から二十一世紀の現在にいたる日中関係、東アジア関係を長期的な歴史の目で捉えなおすことを提唱する。その上で、本来的には関係構造の中に位置づけられるべき日本を含めた東アジアの近代史を、諸々の政治枠組みから開放し、現在も含めた歴史の流れそのものへの洞察を加える必要性、「世界やアジア、とりわけ東アジアの歴史を『つぎ目のない織物』として見通す作業を急がなければならない」（本文81頁）と主張している。

上記の問題意識を受け、第Ⅱ部では、歴史研究上の視座を問題としてとり扱う。(4、「歴史のなかの中国革命」5、「中国近代の源流」6、「再考・辛亥革命」7、「二つの近代化の道—日本と中国」) この視座を扱うことについて、4の「歴史のなかの中国革命」で著者は「視座が問題になるのは、視座の位置や展望する視野の広がり方の違いによって、革命の捉え方が変わり、ひいては中国の現在が過去の革命あるいは、いわ

ゆる中国型社会主義とどういうつながり方をしているか、つまるところ現代中国をみる見方に関係するからである」（本文87頁）と述べている。通説では、中国革命とは1840年のアヘン戦争を皮切りとし、1949年の中華人民共和国の成立、さらにその社会主義建設過程までのことを指している。中国革命は、西欧列強の侵入を契機として起こり、“西洋の衝撃”に触発される中で展開し、その内容を深めていったという理解である。こうした通説に対して著者は、中国革命の萌芽を十六世紀末から十七世紀初頭、明末清初にかけて生起したとし、中国固有の土地所有制にその起源を見出している。同時代の日本が世襲制と長子相続制をとっていたのに対し、十六、七世紀の中国では均分相続が基本であった。均分相続制をとると、どんな広大な土地も三代を経るうちに分散・流動化してしまい、それぞれの経済状況は逼迫する。そうした状況に備えてのいわばセーフティ・ネットして「宗族制」という共同的所有・相互扶助を基礎とした血縁的な共同組織が発達することとなる。太平天国以来の中国では、こうした中国固有の制度である「均分」「共同所有」（公有）が、思想的にも強化されつつ、基本的に毛沢東（1893-1976）の国家共同体的な田土公有（国有）化、中国の社会主義化につながったという歴史の流れ、新しい視座をここで著者は示している。この点に関してはまた後述する。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部で示された視座をも

とに書き下ろされた論文(8、「礼教と革命中国」 9、「もう一つの『五・四』」)と、本書にとっての隠れたテーマであるところの、アヘン戦争近代史観(第Ⅱ部で扱われた、アヘン戦争を中国の近代の始まりとする歴史観)と中国における近代の問題を論じるのに、付章「歴史叙述の意図と客観性」、さらに「結びに代えて」が加えられており、どのようにして歴史研究に向かうか、という非常に本質的な問題が著者の考えに基づき明確に示されている。

以上、本書の各部分を要約した。本書はある明確な問題意識に基づき、その問題意識に基づいた仮説的視座を提示し、最後にその視座に基づいて論文を書きそれを実証する、という手続きの構成となっている。そこで以下は、著者の問題意識をめぐる代表的な論争点ふたつに関して評者なりにまとめてみたいと思う。

まず最も議論を呼ぶと思われるのが、本著の「近代」概念の設定であろう。著者は、『方法としての中国』(1989年)以来、一貫してヨーロッパ「近代」に対して中国固有の「近代」のあり方を主張してきた。こうした著者の主張に対し、近著『中国民族主義の神話 人種・身体・ジェンダー』で坂元ひろ子一橋大学教授は、「対ヨーロッパという構図から抜け出たわけではない」とし「溝口の文化本質主義的傾向」<sup>1)</sup>と厳しい見解を示しており、これに対して近代は一定地域をこえた共通性や共時性を持つという「近代の共時性」という視点を中国近代

に導入することを提唱している。また坂元の視点をより構造的に、複雑な関係性で捉えようとしたものが、京都大学教授の山室信一『思想課題としてのアジア 基軸 連鎖 投企』である。山室氏はアジアについての近代を考察する際、「日本・アジア・世界をそれぞれ孤絶したものとみるのではなく、相互に交叉し、入れ子構造をなす複合的な関係性の諸相を構成するものとみなし、そこにいかなる空間的な規定性が働いたか」<sup>2)</sup>という課題を思想史的に捉えようと試みている。

両者の議論で共通するのは、「近代」定義を西欧由来のそれに特定している点である。西欧的「近代」とは基本的にはルネッサンス以来発達した科学技術、産業革命以来発達した資本主義経済、政治制度的には国民国家を擁するものである。この「近代」が、坂元氏の場合は漸次拡大し、アジアを包摂し、グローバルゼーションという形で現代につながっているという歴史観になっている。山室氏の場合は、異なる地域に異なる伝統のあり方を認めつつも、「アジアという地域がいつどのような経緯によって『近代世界』に組み込まれ、それによって地域内にいかなる変化が生じたのか」<sup>3)</sup>というように、アジア側は、やはり西欧の衝撃を受けて変化する存在であるとの見方を根底に秘めている。

これらの見解に対し本著では、そもそも西欧、非西欧という二項対立や、中国が「近代」世界に組み込まれる過程や構造を

問題とはしていない。上述の第Ⅱ部「4、歴史のなかの中国革命」を改めて例にとってみよう。この中で著者は、あくまで中国の歴史にとっての「近代」の意味を問題としている。ここでは主に太平天国と軍閥の割拠の例を、従来の説と対比させて例示している。通説では、「太平天国の動乱は『アヘン戦争による多額の出費と賠償金の負担が重税となって民衆を苦しめ』た結果起こった」ものであり、軍閥割拠とは「地方自治というよりは『近代』国民国家の建設過程の障害物という文脈に入る」ものであるとされている。(本文90頁) これらの事象を、著者の主張するように十六、七世紀以来の歴史の文脈であらためて解釈すると、太平天国のスローガンである田土の公有(共有)化というスローガンは、宋代以降の私的所有制の広がりの上にあるもので、伝統的には田土を「王土」、すなわち原理的に朝廷・国家のものとする観念に比して、それを原理的に「民土」とする観念が広まったことをうけた「均田均役」要求の議論の流れの上にあると解釈できる。同様に、軍閥割拠にいたる歴史の流れも、著者の整理では以下のようになる。明末以来、思想家達によって主張された地方自治論は、制度としては認められることはなかった。だが清末に広がった宗族制は、地方の名望家(郷紳層)によって各地方に設置された塾、書院、孤児院、施療院などの形を取って地方自治の一種として機能した。このような社会勢力の蓄積が、太平天国時、

清朝正規軍に代わってその鎮圧に活躍した湘軍(曹国藩の要請で湖南省の郷紳層が建軍に負担)、李鴻章に建軍された安徽省の淮軍、として結実した。やがてそれらの地方軍が清王朝を倒壊させ、各省の独立、さらには辛亥革命へ、と歴史を動かしたのであった。

以上のように、著者は清王朝倒壊の道すじを中央集権から地方分権への過程として描き出すことによって、中央集権化=近代化、として評価する従来の西洋中心主義的な歴史観とは全く異なる中国独自の「近代」のあり方を示しているのである。

本著でもう一つ大きな問題となるのが、その歴史叙述を問題とした付章の「歴史叙述の意図と客観性」であろう。著者の問題意識を本文から引用してみよう。

「歴史学においては、事実の正確さもさることながら、それ以上にその事実をなぜ取り上げ、その事実によって何を伝えたいのか、という叙述の意図が実は陰の主役を演じている。歴史家は、多くの場合、自分が客観的な目で文献から客観的な事実を拾い出していると思いをしているが…実はそのほとんどの場合、ある組み立ての構造を脳裏に無意識に描きながらその構図に沿って取捨選択していることに気づいていない。実際は多くの歴史家は、本来は主観に属するはずの自分の意図がどのように客観性を保ちえているのか、という深刻なジレンマに不断に直面しているのである」(本文211頁)

さらに著者は、客観的な歴史像を何故描く必要があるのか、という事について以下のように説明する。

「もし、私個人にとって、中国の歴史像を掘り起こすのは、どういう意図からか、と問われたなら、それは、ここまで例を挙げてきたような、中国の歴史像に見られるさまざまな歪曲を元の姿に返し、そもそもその歪曲自体を生み出した原因でもあるところの、世界の偏見、差別、歪曲と戦うということである、と答えるだろう…その偏見などはただ人種、民族差別という現実的な政治・社会感覚に止まらず、知的位相でも諸々な形に変装し、人々の知性に浸透し、本人たちが偏見を偏見と見なさないまでに血肉化している。とくにアジア研究の領域においては、西洋視点に頼って歴史を構図するという偏見の所作が、教科書のレベルにまで定着し、偏見の再生産が大手を振って行なわれている」(本文225頁)。

アジア、とりわけ中国を見るときに、ある一定の枠組み—著者の言うところの「西

洋視点」—で構図を描いてしまい、そのことに我々自身は気づいていない。まさにこの点が、現実世界では冒頭に挙げた、日本の数多くの雑誌に見受けられる中国に対する偏見や批判的見解を生みだしているのである。そして、そのような状況を知的に分析し、解明する責務がある研究者でさえ、西洋視点に頼って歴史像を描くことが定着してしまっている。

従来西洋視点に頼った歴史の構図から離れよう、「歴史の内部の脈絡に入る…一言でいえば素手で歴史に入る」(本文226頁)、と虚心坦懐に幅広い資料に分け入ることを提案する著者の言葉は、本著ではまだ呼びかけの段階にあるかもしれない。しかし、かくも長きにわたって第一線で歴史研究に携わってきた碩学の徒の訴えとして、後続に位置する評者にとっては新鮮かつ大胆な提言として響く。評者としては、今後とも著者の示した問題意識を真摯に受け止めて歴史研究に携わりたいと考える次第である。

溝口 雄三 著

『中国の衝撃』

ISBN : 4130130226

262P 19cm (B6)

東京大学出版会 (2004-05-21出版)

## 注

- 1) 坂元ひろ子『中国民族主義の神話 人種・身体・ジェンダー』22頁、岩波書店、2004年
- 2) 山室信一『思想課題としてのアジア』、5頁、岩波書店、2001年
- 3) 山室前掲書、5頁

(Kana NISHINO)